

い、二階から飛び降り、腰を抜かした事、な無闇をしたとも知れぬ。別段、新築の二階から、同級生の一人、威張って、事を出、



話題の本棚

戸田山和久著『教養の書』

望田幸男著『ドイツ史学徒が歩んだ戦後と史学史的追想』

特集／官能

新刊コーナー／新書コーナー／書を持って街に出よう／障害者×東大生

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/

教養の道を歩むための、「おせっきょう」

教養の書

戸田山和久著
筑摩書房



近年、『勉強の哲学』（前号）や『学問からの手紙』（前年五月号）など、勉学の「そもそも」を論じる著作が相次いで刊行されているが、本書もそんな流れの中に位置付けることができるかもしれない。ただし、本書のテーマはズバリ「教養」である。私が所属する人間・環境学研究科は、全学の教養教育を担当していた旧教養部にルーツをもっている。現在でも教養や学際性のあり方がたびたび議論される環境に身を置く中で、「教養について一席ぶつ」と意気込ませては、私もちょっと手をのびさずにはいられなかった。

著者は、『哲学入門』や『論文の教室』などでもおなじみの戸田山和久だが、彼は現在、名古屋大学で教養教育を司る組織のトップを務める。彼の講義ノートが元になっている本書は、三つのパートから構成されている。第一部では、「教養」の定義が主題となる。

まず、教養が「知識プラスアルファ」のものであることを示した上で、この「アルファ」の部分には、知識の構造化や位置づけのされ方、自己相対化や関連さといった人生の態度、のみならず社会の担い手としての人格形成のプロセス、といった要素までも含まれることを明らかにする。つづいて第二部ではこの定義を元に、私たちが終わりなき「教養の道」を歩む障害となるものを「現代イデオロ」と

して論じ、さらに最終第三部では、この「教養の道」を歩む具体的なアドバイスを、情報リテラシーや論理的思考を例に示してゆく。全体を貫く軽妙な語り口や（著者自身も自覚しているとおぼし）話の脱線の多さは、まさに〈戸田山節〉炸裂といったところである。プラトンの対話篇などのありがちな古典を引用するだけにとどまらず、たとえば「ダイ・ハード3」などのハリウッド映画さえも参照する奥行きのある教養論には、著者の「教養」実践がにじみ出ている。

しかし、ここで私たち読者が注意しなければならないのは、本書で述べられているのは、あくまで数ある教養論のひとつにすぎないということだろう。著者の巧みな話術のために、それらしい内容を嚙呑みにしては、ある種の「イデオロ」に嵌まっていくばかりである。書かれていることをよく吟味しながら、その内容をいかに相対化し、真なる「教養」を追い求められるかは、本書を読み終えた後の私たちの実践に委ねられている。（おそらくは戸田山自身も、本書の内容も相対化されるべきであると考えているはずだが、このことを本文に含めては、その含まれた相対化自体も相対化されることが求められ、ひいては論旨が揺らぐことに繋がりがかねない。）

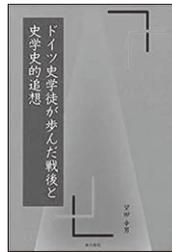
とはいえ、大学新入生や高校生を読者として想定しているため、前提される知識の量もそれほど多くなく、また、手に取る時期は早ければ早いほどよい良書である。私自身も、あと五年ほどは早くこの本に出会って、著者からのありがたい「おせっきょう」を食らっていたかった。ひとりでも多くの人が、ここから刺激を受けた「幸福な」読者となることを願うばかりである。

（四一六頁 本体一八〇〇円 2月刊）
（八雲）

「日本特有の道」を探して

ドイツ史学徒が歩んだ 戦後と史学史的追想

望田幸男著
本の泉社



一九五〇年代の京大に甲府生れの一人の若き史学徒がいた。甲府での新制高校時代既に民主主義科学者協会での活動を経験した早熟なマルクス主義的教養主義者は、折からの日本共産党の武装闘争路線の中で「国民的歴史学運動」の渦中に身を投じる。しかし、本誌でも取り上げられた伊藤隆（二〇一五年六月号）が挫折し、原秀三郎（前年七月号）が夢のあとをみたその運動は彼に「心の旅路」の傷跡を残した。丸山真男と鶴見俊輔を「方向指示器」として復活した彼は大家史学批判の急先鋒たる京大西洋史の越智武臣の講筵に連なり、七年の学部生活を経て大学院に進学する。

評にもならず長すぎる、『ドイツ史学徒が歩んだ戦後と史学史的随想』第一章の要約となった。本書は著者の同志社大学名誉教授望田幸男（一九三一〜）が独比較史の泰斗となり、自己の領分で社会参画していく様子を描いた自伝である。望田が革命の闘士だったことは門外漢につき知らなかったが、戦後が歴史化し、小国民世代の証言が史料化していく今、適材により適書が書かれた感がある。

さて、修士論文を提出し研究者として駆け出した望田は人文研の共同研究と高度経済成長の中で、「後進国」ではない日本に直面する。新幹線のある日本は英仏に追いついたのか。懊悩の中に望田が

みつけた答えが自己の専門であるドイツと日本の比較史だった。立憲主義を類型化するという野心的研究は同時代の人文研の上山春平率いる明治維新研究班とも戦いつつ、確固たる位置を占めた。その地歩を元手に望田は現存するドイツ現代史研究会を発足させ、先端分野の教育社会史に分け入っていく。極東の学たる「西洋史」と人類史上有数の高度成長は確かに併走しているのだ。

ドラマチックな前半と比べて同志社の組合活動や在住の向日市などにおける平和運動を所収した後半は些か間延びして見える。特に最終第六章の対談は「ドイツ第四帝国」が人口に膾炙した二〇一〇年代のものにも関わらず、歴史問題について「ドイツ〇、日本×」の図式に拘泥し続けており、正直幻滅したのは告白せねばならない。

しかし、評者はそれでも後半部に価値があると考ええる。同志社の思い出を述べた四章からは井ヶ田良治のような同志社を代表する戦後民主主義者との交流と「同志社文化史学」的空間との連関が、大学の組合活動から京都の平和運動への道を描いた五章からは学問分野と同等に「忘却するわけにはいかな」いものとして存在した社会運動への参画を看取できる。それは政治Ⅱ学問Ⅱ芸術の空間に生きた知識人のライフヒストリーとして不可欠のピースであり、それを閉却しない叙述が本書の紙価を高らしたといえる。

政治と学問を往還した一人の歴史家の生からは地域研究者としての西洋学者ではない、戦後ドイツ史で闘われた「ドイツ特有の道」を自国に探した一人の知識人の様相を看取できる。学問と政治を考える全ての学問人に勧めたい一冊。

（投稿・千広）

（二一六頁 本体一五〇〇円 1月刊）

〈特集〉 官能

他人の体に惹かれる、身体的な快楽を享受する、人間であるのに動物の様に喘ぐ。官能、それは秘匿的でありながらも轟感的である。表立って直視できないが誰もが目を離すこともできない魅惑。その享楽は折々の作品の中に織り込まれてきた。官能の歴史とは芸術の歴史であり、人間という動物を捉えるうえで欠かせない要因である。普段は敬遠している人も、今一度快楽に貪欲な人間の性を眺めてみては。(きもの)



目で愉しむ官能

官能を、そして性愛をいかに表現するかという主題は、様々な人を魅了してきた。文筆家然り、芸術家も然り。本特集ではまず手始めに、画家たちが残した作品からその深淵な世界を探究することしよう。

——西洋美術における官能

初めに、池上英洋

著『官能美術史』
ノードが語る名画の
謎」(ちくま学芸文
庫)を紐解く。表紙



を飾る艶めかしい裸体にドキリとしながらペー
ーッをめくると、そこで繰り広げられる様々
な性の営みが目に飛び込んでくる。

古い例を挙げると、ポンペイ遺跡では男女
の性行為を描いた、一世紀頃のものも推定さ
れる壁画が見つかっている。現代のボルノほ
ど扇情的ではないものの、密着した男女が特
別な親密さを醸し出すその画は、誘惑的かつ
刺激的だ。キリスト教的倫理が性表現に著し
い制限を加えた中世を挟み、ルネサンス期に
は性に奔放だったギリシア神話をモチーフに
した絵画が多数制作され、裸体画が花盛りと
なった。中でも妖艶な肉体を大胆に晒した

「横たわるヴィーナス」のモチーフは、その
官能性から根強い人気を誇ったとのこと。

本書では、レンブラントやルーベンス、レ
オナルド・ダ・ヴィンチなど、私達もよく知
る画家による男女の交わりの絵も紹介されて
いて好奇心をそえられる。著者曰く、一連の
作品は「長い時の流れの中で集積された、ひ
とびとの愛の諸相の歴史」に他ならない。そ
れを辿ることは、我々が今なお捉えようと腐
心している「性愛の本質」と言わばきものに
近づくと手掛かりになってくれるだろう。

——女性たちの恍惚

前掲書で紹介されている画家の一人に、ク
リムトがいる。ライナー・メッツガー著『グ
スタフ・クリムト ドロイーイング水彩画作品
集』(新潮社)では、女性の姿態を妖艶に描い
た作品を素描から贅沢に愛することができ
る。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてウイ
ーンで活躍したクリムト。目が眩むほどの金
を使った高い装飾性で知られるが、彼の絵は
風景面を除けば美に九
割五分が女性を主題と
している。アトリエは
複数の女性が常駐する



妖しげなハーレムと化し、モデルは画家の指示があれば惜しげもなく大胆なポーズをとっていたそう。ピカソもそうだが、才能ある芸術家と女性達の関係というのはスキャンダラスな匂いがつきまとう。

クリムトの作品の中でもとりわけ、匂い立つようなエロスを感ぜられるのが「ダナエ」である。ギリシア神話をモチーフにしたこの絵は、王である父親に幽閉された娘のダナエの下に、黄金の雨に姿を変えたゼウスが降り注いで交わる、という場面を描いている。

この絵でダナエは、胎児のごとく全裸で体を丸めており、画面を大きく占めたその腿は肉付きがよくエロティックだ。ダナエの脚の間には、ゼウスが身を扮した黄金の雨が滝の如く流れ込み、それを受け入れた彼女の頬は上気している。両眼を閉じたその表情、吐息が漏れるかのように半開きになった唇からは快楽に身を委ね切っていることが見て取れる。神話の一場面とは思えないほど、生々しくて肉感的だ。本作の隣にはその元となったスケッチも並べられており、作品の軌跡をたどることが出来る。

本書には、ベッドに寝そべりながら自慰行為にふける女性、優美に体をくねらせて絡み合う女性たちの素描なども収録されている。それらを見ているうちに気づくのは、彼女た

ちからは「異性に向けられた媚び」というものが微塵も感じられない点だ。

もちろん、男性であるクリムトが女性を描くという意味で、主客関係は厳然と存在している。しかし、実際に絵の中には単に「異性の欲望の対象」という受動的な存在ではない。「視姦」というのは見つめることによつて相手を辱めることであるが、画家に見られた彼女達はそのような恥じらいを一切感じさせない。そこにいるのは、自ら進んで快

官能の後ろにあるもの

前章でみた絵画における官能の芸術を眺めていると、それが一般的なヌードと何が違うのだろうかという疑問が浮かんでくる。一糸まとわぬ裸体、人間というフォルムが作り出す曲線美。……しかしそこに官能はない。体がそこにあるだけでは、欲情は生まれない。

破滅と背徳

小林修士著『密会』(玄光社)を眺めていると、先の疑問への応答が浮かんでくる。写真集にもかかわらず物語のように構成される本書は「私は妻が浮かしている間、しばしば関係を持った女性を自宅に連れ込んでいた。」

楽に没入した存在なのだ。先ほど紹介した「ダナエ」も、実は自慰行為を描いているという解釈も可能なことを付け加えておく。

クリムトが表した、女たちの自由の囀。その世界の住民たちは、後を引くような蠱惑的な魅力に溢れ、我々の心を掴んで離さない。官能にはこのような大らかさがある一方、どこか後ろ暗いところがあるのも魅力の一つだ。次章では、そんな官能の影の部分を見ていこう。(はるな)

という一節から始まる。映し出される彼女達は愛人であり、慣れ親しんだ家屋は秘密の舞台だ。

本書が切り取るものは、



秘密故の激しさであり、二人しかいないが故の欲望の発露である。見られることで閉じ込められていた感情が脱がされ、獣のように癡猛な身体が姿を見せる。秘密の中で官能は蠢き、背徳とともに膨張する。不倫がまさに倫理に反することを知っているが故に、理性で抗うことが出来ない引力を放っている。

こうした目で愉しむ官能もいいが、時に人

間の想像力は視覚を超えた官能の世界を作る。読者には文字で読む恍惚にもぜひ触れてほしい。初めに大江健三郎著『性的人間』（新潮文庫）を紹介しよう。

主人公のJは若くして一人目の妻を自殺で喪っていた。自身の性的嗜好から妻を死に追い込んだJはどうすれば自分が赦されるのかを求めている。それは性との付き合い方であり、世界との向き合い方でもあった。

本書は二部構成だ。二人目の妻の要望で「地獄」という映画の撮影のために別荘を訪れる第一部。若き男女を巻き込んだ映画撮影は性に溺れる夜を迎える。しかしJはそこでも一線を踏み越えることが出来ない。

第二部は痴漢として生きることを決意して町を徘徊する話だ。一歩間違えれば社会的な生命が終わるリスクを興奮剤としながら、日々電車に乗っていた。その生活は芸術のために痴漢をする少年との出会いで破綻する。

物語の主軸は破滅さ故の欲情だろう。中でも第一部で若きジャズシンガーがボードレールの詩の朗読を聞く場面は印象的だ。愛撫された少女は喘ぎ声とともに語るのだ。「ああ、ああ、あそこには、ただ、秩序と美しさ、興奮と、静けさと、ああ！ 快楽のほかに何一つない。」

悲劇と雅

一夜の恍惚。しかし瞬間的な快楽は時にとても美しい悲劇を作る。その悲しみは欲望の夜とセットなのだ。最後に日本文学の古典、『源氏物語』を紹介しておこう。（河出書房新社 日本文学全集4-6 角田光代訳）

教科書でもご存じの通り光源氏の誕生から始まる本小説は、彼の性体験を赤裸々に描いた作品でもある。気になる女性がいれば歌を送り、人妻だろうが幼女だろうが口説いていく彼は、些か倫理に欠けたプレイボーイだ。幼き頃に母を喪った源氏はその面影をいつまでも求めていた。しかしその行動が義母を妊娠させ重い罪を二人は背負う。また人妻を口説いた源氏は女の嫉妬を買ひ、生霊となっ



自分だけの官能のかたちを求めて

背徳、嫉妬、破滅。人を狂わせる官能の世界にはいつもセックスがある。それは人間の欲望を解放するが、同時にかなり規範化されてもいる。勃起し、挿入し、射精で終わる。当たり前かもしれない。だが規範があれば、必ずそのコードに馴染めない人がいる。ほん

た女によって好きだった夕顔を喪ってしまう。心の空白を埋めたい。それゆえに性と愛を求める源氏の行動は、憎しみや罪責の種を作っていく。

源氏物語の美しさは、光ある日々以上にそれ故の暗さを描いているからなのかもしれない。時の巡りの中で喪われていくもの、一夜の行いが引き起こす災難、手に入れたと思っただけで離れていく恋。千年前の文学にも今の私たちと変わらぬ過ちがあり、生きることの困難さがある。そしてその暗さがゆえに、忘れられない夜が一層雅に見えるのだ。

官能は常に性愛の問題であり、それは性交を伴うが故の悲劇を生み出してきた。しかし果たしてそれだけなのだろうか。私たちは他人と交わらなくては恍惚を得られないのか。最後にその問いを考えてみたい。（きもの）

どうにこれが愛情表現なのか？ ほんとうにこれが肉関係の極致なのだろうか？ 官能特集の最後に、普通のセックスを解体して、新たな性のあり方を探してみたい。

性器の解体

まずはセックスで主役を演じる性器を性的

な文脈から外してみよう。サルトル「水いらず」(『水いらず』所収、新潮文庫)の主人公は、性的不能の夫と暮らしている。普通なら、満たされない欲望を抱えた妻は道ならぬ恋に走る……でもなるところが、彼女は不能であるがゆえに夫を愛する。夫の柔らかなペニスほうぶでかわい。妻はそれを愛撫し、接吻する。夫を好きなのは、「この人のあれがけっして堅くならず、けっして頭をもちあげなかったから」。妻にとってセックスは「男に半分窒息させられること」だった。妻の友人は、離婚して普通の男と再婚するよう勧めるが、彼女は結局いまの夫といることを選ぶ。「うそだ、この人が不能だなんて。純なんだ、純なんだ」。二人の触れあいは純な子どものように楽しげで、穏やかだ。

村田沙耶香「満潮」(『変半身』所収、筑摩書房)にも、セックスレスの夫婦が登場する。二人はきょうだいのように仲よく暮らしていたが、ある日突然、夫が「潮を噴いてみようと思っただ」と言い出し、夜な夜なひとり浴室に籠るようになる。潮という言葉聞いて妻が漠然と抱いた嫌悪感を、友人が代弁する。「潮は、私たちのものじゃない。男が女の身体を染しむためのもの。だから絶対に、私は一生、身体からそんなもの出さない」。元彼との初めてのセックス以来、妻は自分の膺が

自分のものでないと感じていた。一方で射精の好きでない夫も、セックスのたびに精液を出さなければならぬ重圧を感じていた。どれかの性欲に絡めとられていた自分の性器を取り戻すため、二人は自分の力で自分のために潮を噴くことを約束しあう。

どれかの性器を入れたことはあったのに、自分で膺に触れたことはなかった。最初はおそろおそろ、しだいに楽しくなって指を這わせる。口の中にも手を入れてみる。「左手で歯の硬さに驚き、右手で膺の感触にはさまれていると、身体の中で手が繋げそうな気がした」。これまで、こんなふうに分身の体と触ったことはあったか。自分の体と戯れたことはあったか。性器がただの体の一部となり、新しくも懐かしい感覚が押し寄せる。

セックスの解体

最後に、非性器的エロスの探検者・松浦理英子の『犬身』(上下巻、朝日文庫)を紹介しよう。生粋の犬好きで自称「種同一性障害」の八束房恵は、メフィストフェレスのような謎の男と契約して犬に変身する。飼いは玉石梓(なまがしき)人間時代の房恵がこの人の犬になりたいと切望した人だった。梓にフサと名づけ



られ、フサは順風満帆な犬生を歩むかに思われたが……。

「犬になりたい」というとマゾヒスティックな欲望のように聞こえるが、房恵の犬化願望は、犬として人間と強い信頼で結ばれ、優しいスキンシップを交わしたいというものだった。それはいわば「快楽の基本形」とでも呼ぶべきもの。物語の設定は奇妙奇天烈だが、重点が置かれているのは、フサと梓のこうした単純ながら濃やかな愛情のやり取りである。梓は幼い頃からずっと兄に性的虐待を受けていた。意気阻喪する梓を慰めようとフサは梓をじっと見つめる。梓はいとおしむように、フサの背中や頬を撫でる。フサが梓を舐めて応えると、梓はフサの毛をやさしく指で梳く。相手の気持ちを汲みとり、自分の気持ちの伝え方を探して、触れる。「もしかすると親子の間のものであれ友達同士の間のものであれ、すべての体の触れ合いの中にはあらかじめ性的な快楽の萌芽があるのかも知れない」。夜の海のように静かで、繊細なエロス。触れあう、撫でるといった皮膚感覚を研ぎ澄ませたとき、わたしたちの性はどうなふうに変容することになるだろう。

官能。それは人の飽くなき追求の対象。人が肉体と向きあうかぎり、これからも多様な官能が表現されていくにちがいない。(三七)

新刊コーナー

八本脚の蝶

二階堂奥歯著
河出文庫

若くして自殺した者の手記には人を引きずりこむような魔力がある。本書は二〇〇三年

に二五歳で亡くなった二階堂奥歯のウェブ日記「八本脚の蝶」を書籍化したものである。

二階堂奥歯は無類の読書家。年に三六五冊を超える本を読み（学生時代はその倍、小学生のときは三倍）、編集者として働いた。ウィトゲンシュタイン、ボルヘス、ポーリーヌ・レオージュをはじめとして、日記には引用が所狭しと並ぶ。本だけでなくおしゃれも好きで、お気に入りのヴィヴィアン・ウエストウッドの服やコスメの話も頻出する。彼女はエネルギーッシュで、とても生き生きしている。

だが彼女は脆くもあった。クリスチャンではなかったが、自分の絶対的な拠り所を神と呼び、必死に求めていた。だけと同時に、安易な盲信によって思考を止め兼ねること

許さなかった。彼女は言う、「祭壇の前で絶対神に仕える幸福を多分私ほどよく知っているし、それを求めてもいる。でも、それでも、そこに跪いてはいけぬ」。死の間際には、とりわけ聖書からの引用がとみに増える。そのとき彼女の胸に去来したものは何だったか。彼女は強かった、自分の弱さと格闘しようとした。強いから、その強さに耐えきれずに死んでしまった。

奥歯はわたしとそう歳がかわらない。知識量では到底敵わないが、その若さゆえの生真面目さには共感せずにはいられない。(ミセ)

(六〇二頁 本体二二〇〇円 2月刊)

先生も大変なんです

いまどきの学校と教師のホンネ

江澤隆輔著

岩波書店



さて問題です。昼休み無し、残業代無し、月に二〇時間の時間外勤務は当たり前――。この仕事ってなんだった？

教師だ。思い出して欲しい。自分が登校したときには既に職員室にいて、部活が終わったあともまだ働いている。それが学校の教師

だ。本書は現場の教師が実際のデータを用いながら、教師の仕事の実態を明らかにしているものだ。

驚くべきデータは、中学校教師の半分以上が、「過労死ライン」を超えているというのだ。二〇一八年の「OECD国際教員指導環境調査」では、日本の中学校教師はOECD諸国の中で最も多忙な働き方をしているというデータも出ている。この現状について、著者は「教師の苦しい状況は、教員志望の人数、さらには将来にわたって教育の質にまで負の影響を及ぼしつつある」と警鐘を鳴らしている。

特に考えさせられるのは、「部活動」への言及だ。教師が当然部活動の顧問を務めるものだと、と考えていた人も多いだろう。しかし、実はそうではない。部活動は学校で行うべきカリキュラムには含まれていない。にもかかわらず、「教師は『子どものために』と言われると時間を問わず動いてしまう存在」であるが故に、部活動顧問を教師が断れない現状があると著者は分析している。

キレイゴトは抜きにした、先生のホンネを聞いて欲しい。まずは現状を正しく理解すること。それが教師の大きさを解決することに繋がるはずだから。

(二七六頁 本体一八〇〇円 3月刊)

博論日記

ティファアンヌ・リヴィエール著

中條千晴訳 花伝社

「博士学生はつらいよー。」そんな呻き声がコマから漏れてくる。本書は、博



士課程に在籍していた作者がその時の経験を元に描いた自伝的コミックだ。悲壯感を漂わせつつも、クスリと笑えるユーモアを残したタッチで院生の日常を切り取っている。

主人公・ジャンヌはフランスの中学校で教師として働いていたが、仕事を辞めて大学院に入学し、カフカの研究に身を投じることを決意。「きっかり3年」で博士課程を終わらせると息巻き、野心的な研究計画をつくるも、一年、また一年と大した成果も出ないまま過ぎてゆく……。入学当時の若々しく洗練とした表情は次第に色褪せ、実際の年月以上にぐっと老け込んだジャンヌの顔は、そのしんどさを何よりも物語っている。

院生は人間関係の気苦労も多い。全く指導をしない指導教官に、マウンティングしてへる先輩。悪気なく「いつ博論はできるの……」

と聞いてくる親戚たち。同棲していたパートナーも愚痴ばかりのジャンヌに愛想を尽かす。煙草の吸殻やビザの空き箱が溜まった暗い部屋で、ベッドに横たわりながら「カフカは一体何が言いたかったんだろう……？」と天井を見つめるジャンヌ。そんな痛々しい姿を見てエールを送らずにはいられない。

博士学生（とりわけ研究が行き詰っている人）にとっては心の慰めとなるに違いない。それ以外のの人にとっても、大学院生活やフランスならではの研究事情を垣間見ることができ、満足度の高い一冊である。（はるな）

（三五二頁 本体二二〇〇円 1月刊）

未来をつくる言葉

わかりあえなさをつなぐために

ドミニク・チエン著

新潮社

「コミュニケーション」とは、わかりあうためのものではなく、わかりあえないことを互



いに受け止め、それでもなお共に在ることを受け容れるための技法である」。こう主張する著者の考えは、冒頭に引用されたドゥル

ズの言葉と響き合うような気がする。台湾、日本、ベトナム、フランスと様々な国に家族という拠り所を持った著者が、自身の多言語体験と子どもとの言語的コミュニケーションの経験を通じて会得した感覚を読者に伝えようとする。

著者はハイテガーやドゥルーズの多用した概念、「環世界」を基にして人のコミュニケーションのあり方を考える。すなわち人にはそれぞれ固有のバックグラウンドがあり、それゆえに相手と完璧に意思疎通することは不可能だ。だがその相手との差異に、わかりあえないところに未知の意味や新たな気付きの可能性を見出したい。そしてそのようなコミュニケーションの「場」を創出したい。このような希望多き観測を著者は主張する。その中で評者が興味深く感じたのは「共話」という概念の提示だ。日本語でのコミュニケーションに顕著に見られるもので、主語を明確にしない、あるいは互いが少しずつ各自の主張を組み合わせていくことで、「自他の境界を融解させる」ようなコミュニケーションが生まれるのではないかというものだ。

マルチリンガル、そしてコンピュータ言語にも通じた著者だからこそ捉えられた、断絶と接続の展覧を描き出す一冊。（ね）

（二〇八頁 本体二八〇〇円 1月刊）

私をくいとめて

綿矢りさ著
朝日文庫

二〇代も折り返しに差し掛かろうとする中でふと、これからの自分の人生はどう進んでいくものだろうか、と考える。その人生は誰と歩まれていくのだろうか、ということも含めて。もし誰かが、この私のことを熟知している誰かが、進むべき道を、その道は誰と歩まれるべきかを教え導いてくれたならば……。

本作の主人公も、そんな問題に対して私以上の差し迫った思いを抱いていたのだろうか。黒田みつ子、三三歳独身。なんでも一人でこなししてしまう「おひとりさま」ライフ満喫中の彼女が遭遇したのは、自分の脳内にいた別人格「A」だった。男性との付き合いにも、自分が家庭をもつということにも距離を感じるようになってしまった彼女に「A」は、ちょっとした会話のトーンから気になる男性の品定めまで、ありとあらゆるアドバイスを施してゆく。彼と語り合う中で、みつ子は夕飯のおすそ分けをしていた近所の多田くんに惹

かれていた自分に気づきはじめる。「A」の声に導かれながら、そして周囲に流されないようにくいとめられながら、彼女は「おひとりさま」を脱却し、他の誰かと進む道を模索することになる。

やや内気な（しかしそれでいて少し妄想癖のある）女性が、やがて同じような性格の男性にアプローチしていく、という綿矢りさ作品に定番のストーリー展開には、もはや安心感を覚える。本作は実写映画化も決定しているようなので、公開前の予習にも手にとってみてはいかがだろうか。（八雲）
（二五六頁 本体六四〇円 2月刊）

草地は緑に輝いて

アンナ・カヴァン著
安野玲訳 文遊社

コロナウイルスの蔓延に合わせ、疫病に翻弄される人間を描いたカミユの『ペスト』が異例の売り上げを記録したことは記憶に新しい。ここで私が紹介したいのは、カミユと同じく生きることにともなう不安や不条理を主

題として扱いつつも、さらに進んで、世界が私たちの生に対して意味や関係性を失うことで、私たちが世界から締め出され、孤立して生きるようになることに対する、より徹底された不安を描き出す作家、カヴァンである。

本書は彼女の中期短編集であり、一三の作品を収める。その魅力は対照的な次の二つからなる。一つは、繊細かつ冷徹たる文体によって表現される、常に正体不明の何か（世界全体、とも言えるだろう）に怯える不安である。もう一つは、そうした不安に覆われた不穏な世界の中にある瞬間現れる、グロテスクで極彩色の夢幻的な光景である。だがそれは次の刹那には消え、残像を残してゆく——このように、よそよそしく冷たい世界と、そこに一瞬妖しく光る儂い美の残像とがなすコントラストこそが、本書の魅力の核にある。

無人の薄闇の中で猛然と増殖する草地、全てが凍り付き氷の中で静止した夜の街、静かな湖畔に突如広がる動物と人々の狂騒。カヴァンの描く世界はその理由や意味を明かすことなく展開し、その不気味さに私たちは遠ざけられ、その生々しい美しさに引き付けられる。私たちが拒絶しつつも魅了する世界が放つ、不安と美の危険な香りを味わってみてはいかがだろうか。（投稿・海）

（二七六頁 本体二五〇〇円 2月刊）

みんなの「コミュニズム」

この世界はどう変わるの？
ちょっとしたおはなし。

「ニダムザック」著 橋本紘樹訳 堀之内出版

本書は各国の若い世代から熱烈な支持を得ているベストセラー。日本語版は大きく三部



から成る複合的な内容となっている。

最初に語られるのは歴史に即したおとぎ話だ。コックリさんのように動き出す工場により、みんなは苦痛を強いられる。価格競争、長時間労働、そして恐慌。資本主義の悪夢に對し、みんなは別の夢を繰り返し描きトライするが、その度に問題が発生してしまふ。そしてみんなは何度もこう言う。「だめ、だめ、こんなのコミュニズムじゃない。」

次におとぎ話のエピソードとして、著者アダムザックがコミュニズムの思考法について解説する。各所で難解と評判だが、特に重要な主張は、コミュニズムの指す世界像が変化し続けていくという箇所だろう。これまでの共産主義を捨て、如何にして本当のコミュニズムを渴望できるか。この問いを想像させるために、著者はアドルノの言葉を引用する。

また訳者もそれに力を貸している。「共産主義」が「コミュニズム」と訳されることで、凝り固まったイメージが刷新されていく。

最後に日本語版限定の著者インタビューがある。二〇〇四年に初めて世に出た本書が、その後の歴史の動きに合わせ、様々に議論のアクチュアリティを変質させてきたことが分かるスリリングな裏話となっている。

おとぎ話にはめでたしめでたしが付き物だが、本書ではどうか？ それはぜひあなたに見届けてもらいたい。その救済の行方は。

(一四四頁 本体一六〇〇円 4月刊)

(とよ)

私たちの生涯の最良の時

アントーニオ・スクラーティ著

望月紀子訳 青土社

「ほくが彼らだ
つたら」過去と向き合う際多くの
人々が発する問い。

著者はここに横柄

さや暴力性を見出す。未だ混沌冷めやらぬ戦後のイタリアで成長した歴史家の彼は、それに代わってこう問いかける。「ほくはあの流



れのどこにいるのか？」そしてそれに自ら応えるべくこの文学作品を人々に示す。

この作品には二つの物語が存在する。大戦期イタリアでファシズムへの文学的抵抗を試みた英雄レオーネ・ギンツブルグの物語と、それとは対照的に無名だった著者の祖父母達の戦前・戦中・そして現在までの物語だ。前者はレオーネや妻、友人達の著作を、後者は専ら彼の家族からの証言を基に成り立つ。実際に会うこともなく、立場も大きく異なっただけの二つの物語。彼はそれを対等に並べて語る。なぜなら物語とは過去の人々の、唯一の生存の形である記憶を保存する場なのであり、職業や名声における差異は取るに足りないものだから。対等に語られた二つの物語はやがてある一点で結びつくことになる。それはレオーネと祖父母達の記憶を有する著者だ。そこから後ろを振り返った時、彼には自分へと注ぎ込む大きな歴史の流れが見えていくだろう。こうして彼は自分の居場所を読者と共に再確認し、自分物語を紡いで見せた。

多くの人々の「生涯の最良の時」を経て来た流れの中で、私達も自身の「最良の時」を追い求めるよう最後に著者は説く。記憶に息づく人々と共に、私達はその場所からどんな未来を遙か沖に見るのだろうか。(リンダ)

(二二〇頁 本体二六〇〇円 5月刊)

テキストから遠く離れて

加藤典洋著
講談社文芸文庫



文芸批評というものに馴染みがある人はそう多くないだろう。「読書離れ」と言われて久しいが、それでも小説を読む人はまだ一定数いる。しかし批評となると専門でもない限りは目にする機会もほとんどない。

本書は具体的な文芸批評を行いながら、近年の文芸批評論についての批判を行う。この二パートが交互に進んでいく。主題としては、ポストモダン期に主流となった「テキスト論」の分析である。著者加藤はこの方法では捉えきれない小説が出てきているとして、大江健三郎や村上春樹など多数の作家の作品を考察する。

加藤の取り組みが面白いのは、彼が読解において決して妥協をしないからだ。言い換えると、多義的な、皆違っていていいという解釈をしない。これは美の判断に似ていて、美しいものはまともな人なら誰でも美しいと思う。これを文芸批評で行い、作品の良しあしを語

るには、「こうとしか読めない」という読みが不可欠になる。そのためには作者の意図から作品の「意味」を決定する必要がある。しかしそれは作品の外にいる作者から考えるのではなく、テキストの中の作者の意図を探る試みである。

確証はないがそう読むことで作品の本当のよさが明るみになる。それ以外にないという加藤の不器用なまでの愚直さは、しかしそれゆえに説得力を持つ。相対的で答えのない社会に生きる人々に、小説を通してその問いに挑む加藤の姿勢は必見である。(ナガイ)

(三八四頁 本体二〇〇〇円 4月刊)

抵抗権と人権の思想史

森島豊著
教文館



《人権とは何だろっか》

黒人差別からデモの旋風が巻き起こる世界において、

この問いは改めて再考されるべきであろう。著者は人権の根本に抵抗権を見出す。本書はキリスト教のプロテスタントにおいて抵抗権

が形成され、その概念がアメリカ憲法そして日本国憲法まで流れていく第一部と、西洋的人権ではない日本独自の人権概念を考察する第二部に分かれている。

抵抗権の形成は教会と国家の分離において登場したカルヴァンが影響している。教会と国家を神の支配の代行として考えるカルヴァンは国家や君主でさえも神に反逆するとき、その服従を拒否する例外を設けた。「神の下の平等」を思考する人間像は「人民の福祉」という概念に変遷し、人権は理念として法制化されていく。ここでは国家が人民の福祉を目的とする義務があり、それに背く場合は抵抗する権利があるとして憲法に規定された。

一方で日本社会は国民を平等に統合するにあたり「君万民」という概念を使った。天皇を頂点に平等となるこの概念は、理念とした国民像に忠誠心が含まれており、抵抗権を認める思想ではなかった。こうした日本の人権観は現在の自民党改憲草案まで見出されると著者は述べる。

ここで、では非キリスト教圏において抵抗権に基づく人権は根付くのかという疑問が残される。香港デモや黒人差別へのデモないしそれへの各国の反応には、こうした人権観が関係しているかもしれない。(きもの)

(四八〇頁 本体三〇〇〇円 3月刊)

大学で学ぶゾンビ学

人はなぜゾンビに惹かれるのか？

岡本健著 扶桑社新書

ハロウィン、「カメラを止めるな！」や『ゾンビランド・サガ』の盛り上がりなど枚挙にいとまがないように、ここ一〇年ほどのサブカル史はゾンビの時代だったといえよう。本書は社会学・メディア論・歴史学などを駆使しながらそういった直観に言葉を与え、掘り下げた「ゾンビ学」の入門書である。

本書ではまず、最初のゾンビ映画『ホワイトゾンビ』から、昨今のブームのきっかけとなった『バイオハザード』までの映画史が概観される。次にテン年代の数多のコンテンツが検討されるのだが、それらは決して羅列的に並べられるわけではない。その根底ではつねに「どうして私たちはゾンビに惹かれるのか」という問いが駆動しており、ページをめくるとゾンビという他者が私たち人間の本質を否応なく映す分身として突如姿を現わす。

現在、「感染」という言葉がかつてないほど氾濫し、私たちは混乱の最中にある。しかし「ゾンビ学」の受講者なら、そんな中で膨大な過去の事例から冷静にふるまうための術を学ぶことができるだろう。(投稿・NN)

(三〇三頁 本体九四〇円 5月刊)

教師の悩み

諸富祥彦著

ワニブックスPLUS新書

「私が教師を支える必要性を感じているのは、それだけ精神的に追い詰められている先生が多いからです」筆者はこう語る。本書は「現場教師の作戦参謀」を自認する諸富氏の新書である。

本書では、「学級の荒れ」「保護者と教師の関係」「終わらない残業や部活動」等、いま学校現場で実際に起こっているリアルな問題を取り上げ、氏の知見を踏まえた解決策を提示している。その中でも特徴的なのが、あくまで「現場目線」で書かれていることだ。

「教師の働き方改革」やそれに類する本は複数あるが、理想論的な解決策に終始しているものも散見される。しかし本書はそうではない。理想論を抜きにした、現場のリアルに即した事例や解決策を提示している。たとえば、「子どもが嫌い」は、教師失格ですか？のよくな、現場の教師の弱音や本音が掲載されている。それは「弱音を吐いてもいいです」といって抱え込まないほうがいいですよ」といふ氏のスタンスが反映されたものだ。ぜひ一読を。教師の声を聞いて。(出席点)

(二四八頁 本体八五〇円 6月刊)

障害者差別を問いなおす

荒井裕樹著

ちくま新書

医学や社会学ではなく、日本文学を専門とする著者は、「そもそも障害者差別とは何か」という問いと「言葉」で向き合う。

本書は日本の障害者運動を引っ張ってきた「日本脳性マヒ者協会 青い芝の会」の活動である、一九七〇年代の川崎市バスへの自由な乗車要求闘争などを追いつながら進む。しかし特筆すべきは、障害者たち自身がどのような「言葉」を用いて、どのような行為や価値観を「障害者差別」であると認識し、怒っていたのか、当時の資料を用いて明らかにされていることである。障害者自身の手で創刊・運営された同人誌『しのめ』などから引用される「言葉」、例えば「人間として生きて行く最低の条件は、自分の身辺雑事が出来る事」といった当時の当事者の綴った言葉は、どんな理屈よりも、「障害」とは、「差別」とは「人間」とは、という問い直しを読者に迫る。相模原事件の後だからこそ、著者は性急な解決を求める危険性を指摘し、本書の終章のタイトル通り、「障害者差別と向き合う言葉」を紡ぎ続ける。

(二五六頁 本体八四〇円 4月刊)

京都をてくてく

思う存分外出できるようになったら何をしよう?・何人の人がそれを思って毎日を暮らしてきただろうか。不安はあるものの、外出が日常茶飯事のリストに戻ってきた今、部屋の中で温めていたお出かけ計画を実行に移しているだろうか。観光地も軒並み空いていて新京極や寺町、錦市場にもそれほど人がいない。今年だけは観光客の少ない、日常的京都を経験できる不思議な(?)ことが可能だ。だからやってみよう、京都を巡っててくてく。

京都といえばカフェというか純喫茶が有名だ。有名どころでは「フランソア」や「ソワレ」、百円圏近辺なら「進々堂」や「カフェコレクション」などがある。市内各所の趣あるカフェを巡るのに『KYOTO COFFEE STANDARDS』(淡交社)は便利な一冊だ。京都にそのような珈琲店がなぜ出来ていったのか、その由来を説明するところからはじまって読み物としても楽しい。もちろんガイドブックとしても手軽だ。オーナーのこだわりの詰まった店独特の雰囲気、たとえば時代物の内装や調度品。そんなものに囲まれて暫しのタイムスリップ。コーヒーを一口啜って深く息をつくとき忙しい時間が頭の片隅から滲んで消えていく。チェーン店のカフェでPCを開いて作業するというのが一時期流行っていたと思うが、それとは違う自分の時間に浸れるというのが喫茶店の楽しみといえるのではないだろうか。自分の部屋で休むのに飽きたらふらっと行ってみたいものだ。

お店に行くだけでは物足りないという人には、帰ってきてても楽しんで



めるような外出先を紹介しよう。『京都紙と文具 ガイド&スクラップブック』(淡交社)では文具店というテーマで京都のあちこちのお店を紹介している。京都といえは着物が有名だが、着物の柄を描き出す型紙や懐紙など和紙の伝統も続いているのだ。掲載されているところでは、上質な紙を使ってノートや文具など普段使いの出来る物で可愛い柄や目を惹かれる上品な形の製品が作られている。ちょっとした遊び心が単調な日々からの気晴らしになってくれる。お店を覗くだけでも楽しそうである。



最後はこれから夏ということで、この時期に合った本を紹介したい。ホラー系である。歴史的な街京都は同時に霊的な話の絶えない街でもある。五山の送り火はお盆にこの世へ帰って来た霊を帰す時の火であり、鳥辺野はかつて葬いの場であり、六波羅にはこの世とあの世とを繋ぐとされる六道の辻がある。夏に涼める場所として有名な貴船神社の奥宮は嫉妬に駆られた女性が呪いをかけに行く丑の刻参りの舞台だったりもするのだ。京都の其処此処にある怪談奇談を集めたガイドブックが『京都怪談巡礼』(淡交社)だ。この本に載っているのは主に近代以降の怖い話だが、近い時代であるがゆえに怖さもよりリアリティを持って感じられるのではないだろうか。夏向け『幽』名観光地巡りをすれば涼しさが得られるだろう。



それではよい外出を。

(まい)

他者のリアルに触れ、私のリアルは揺らぐ

「障害者のリアルに迫る」東大ゼミ（通称・リアルゼミ）は、二〇一三年に開講され、現在でも有志の学生により運営されている自主ゼミである。「障害」や「障害者」について、固定観念を打破しタブーなくリアルに迫ることを目的とし、広い意味での「生きづらさ」を抱える当事者やその関係者の生の語りから、学生一人一人が自由に考え、感じ、語り合える場所を目指している。参加する学生の学部は様々であり、福祉系の勉強会とも、ボランティアサークルとも雰囲気は異なる。綺麗事抜きの「リアル」を語る当事者たちの生に触れ、東大生たちの「リアル」はぐらぐらと揺らぐ。

その揺らぎを生々しく感じられる本が『障害者のリアル×東大生のリアル』（ぶどう社）である。七人のゲストごとに一つの章が振り分けられており、ゼミ顧問の野澤和弘から四頁ほどでゲストが紹介され、そのゲストの話に對する一〇頁ほどの学生の感想文が続く。



例えば第二章・ティスレクシア（学習障害）当事者の南雲明彦。南雲氏はとても喋りが上手く、容姿もいわゆる「イケメン」であり、表情や雰囲気も明るく、知的な遅れや、視力や聴力の問題もない。しかし、文字や数字だけがぼやけて見える。進学していくにつれ、読み書きの困難さから学力不振は顕著なものとなっていき、高校時代には「自分の存在が汚い」と思い、朝八時からずっと手を洗う」という強迫性障害を発症し、精神病院にも入院したという。

「なんで僕は周りの子たちと違うんだ、自分は一体なんなんだ」という自身の思春期の孤独と混乱を、南雲氏はゼミで語った。

南雲氏の話を書き、東大生・澤田氏は「コンプレックス」というタイトルで文章を書いている。小学校時代から必死に勉強した甲斐あって、成績は常にトップクラス。しかし運動神経はイマイチであり、「シャイボーイ」でもあったことから、クラスの中では「真面目くん」として扱われ続けてきた。体育の授業でサッカーをすればヘマをしてしまうが、クラスメートは氣を遣って特にそれをいじったりしない。いじめられても、嫌われてもいないが、深いコンプレックスを感じてしまう。劣等感からの逃避行を続けた先に、東大受験があった。同じような経験のある京大生も少なくはないはずだ。

澤田氏は授業の後、このような自身のコンプレックス体験を南雲氏と野澤氏に話に行った。二人は熱心に澤田氏の話を書き、「出来ないことへの苦しみという点では同じかもしれない」と言ったという。澤田氏は南雲氏の苦しみと自身の苦しみが同じとはもちろん言えないと断りつつも、二人が話を聞いてくれ、そう言ってくれたことが「本当に嬉しかった」と素直に綴る。南雲氏の綺麗事抜きの「リアル」な語りと、自分のどうしようもない話を安心してできるリアルゼミの空気が、澤田氏の鎧を溶かし始めたのだろうか。

本書に加え、昨年出版された続編『なんとなくは、生きられない。』（ぶどう社）も合わせれば、二〇人近いゲストと東大生の「リアル」を読むことができる。そこには本当に等身大の、一人の人間の言葉たちがある。村田淳准教授を顧問に迎え、学生同士の対話を重視した新たなゼミを模索している京大リアルゼミも昨年度から始まった。「障害」や「リアル」という言葉に何らかの引っかかりを感じる方は参加してみてもいい。

編集後記

はじめまして。今月から編集委員をしています、リンダです。普段は詩や小説を読むことが多いのですが、専門や好みに囚われず、色々な本との出会いを大切に、じっくり向き合いながら書評に取り組みたいと思います。

最近三好達治の詩「日まはり」を読みました。私にとって夏を象徴する元気一杯のこの花を、彼は先の戦争の「服喪の花」と読んでおり、そのギャップに衝撃を受けました。向日葵の凛々しさに隠された顔を見たようでずっと心に残っています。文学の照らし出す、普段は見えない間の世界に遊ぶ今日この頃です。(リンダ)

はじめまして、新しく編集に参加することになったナガイと申します。よろしくお願ひします。

昨今のコロナ騒ぎで様々苦勞も多いかと思いますが、空き時間で読書することが増えたという方も多いのではないのでしょうか。私も自宅で本を読む時間が増えました。読書は基本的に一人で行うものですが、たまに外の新しい風を入れてみるとそれまでの景色が一変することがあります。そのきっかけとなれるような、ワクワクできる書評をかけるよう、努めていきたいと思ひます。(ナガイ)

当てよう! 図書カード

本来の予定ならば、今年 23 日に東京オリンピックの開幕式が開かれる予定でしたね。そこで今回は、オリンピックに関する問題です。1964 年の東京オリンピックの際に撮影された記録映画で、総監督を担当したのは次の 4 人のうち誰でしょうか?

1. 小津安二郎
2. 黒澤明
3. 市川崑
4. 北野武

(八雲)

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください(または e-mail:teiyoo@s-coop.net)。正解者の中から抽選で 5 名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは 8 月 15 日です。

4 月号の解答

4 月号の「特集「故郷」に登場していない都道府県は？」の答えは 3. 栃木県でした。応募者 7 名中 7 名の方が正解でした。授業が休講になるなか、ご応募いただきありがとうございます。図書カードの当選者は、深みの巡礼者さん、じろうさん、よっさんさん、アーケロンさん、金鳳花さん(順不同)です。おめでとうございませう。(ミセ)

読者からひびく

〇いつも PDF 版をよく閲覧しているのですが、読者カードにどのような事項を書けばよいか書いていないため、メールで送る際、何を書けばよいかわかりませう。(文・行人)
——いつも読みいただきありがとうございます。『綴葉』の Twitter (@kyodaitaiyo) の固定ツイートにて、読者カードのフォームへのリンクを掲載しました。PDF で読まれる方は、ぜひこちらから声をお寄せください。(ミセ)
図書カード当選者の訂正とお詫び

『綴葉』6 月号 (No.388) 掲載の「3 月号の解答」で発表した図書カードの当選者に、誤りがありました。6 月号に掲載した三名に加え、新たに深みの巡礼者さん、一角犀さん、行人さんの三名を当選とさせていただきます。こちらの不手際で多大なご心配とご迷惑をおかけしたこと、深くお詫び申し上げます。図書カード発送遅延のお知らせとお詫び

現在、新型コロナウイルスの影響により、「当てよう! 図書カード」の当選者および書評が採用された方への図書カードの発送が遅延しております。発送作業の再開は 10 月以降の予定です。ご迷惑をおかけしますが、ご理解いただきますようお願いいたします。